富山の最新ニュース
webun
北日本新聞
ふるさと風土記

滑川市早月加積地区／清流の里めぐり　２０１４年８月１４日

２. ビオトープ

■命のつながり学ぶ場

濃い緑の匂いがする。空気は少しひんやりとして、せせらぎの音も心地良い。

草木が茂り、足元を流れる小川は背丈ほどの草に遮られて先が見えない。ここで大きく深呼吸。思わず、高速道路のサービスエリア（ＳＡ）にいることを忘れそうになる。

蒸し暑い７月上旬。北陸自動車道上り線の有磯海ＳＡ＝滑川市栗山＝の一角に広がる

ビオトープを訪れた。設計段階から携わり、世話を続ける地元の山本勝博さん（７４）＝追分＝が一緒だ。ＳＡには近くの県道からも入ることができ、地域の住民も訪れる。

「カワニナがちゃんと育っていますよ、ほら」

山本さんが３匹のカワニナを手のひらに載せて見せてくれる。ホタルの幼虫が餌にする生き物だ。小川に入ってものの数分で見つけた。

「この面積にこれだけの数がいれば、まずまず。植物も育っているし、だいぶ良い環境になりました」

山本さんは長年、魚津高校や滑川高校などで教えた元生物教諭。富山湾の神秘・ホタルイカの生態研究で知られる一方、植物やホタルなどにも詳しく、小中学校のビオトープ作りを指導している。

ＳＡのビオトープ整備に携わったのは２０１１年。石畳の小川しかなかったが、中日本高速道路が山本さんにアドバイスを依頼。サクラやクヌギ、ハルニレなどの樹木が茂り、草花の間を小川が流れる環境に生まれ変わった。

自然豊かな憩いの場は、地元の子どもたちが命の営みを学ぶ場でもある。山本さんが指導する学校の一つ、東加積小の児童が１１年から、同校で人工飼育したゲンジボタルの幼虫を小川に放流。ことしも５月に約５０匹を放した。

「ホタルは、すみたいと思う環境があれば自然と舞うようになる。子どもたちに伝えたいのは、命は皆つながっている、ということなんです」

山本さんの言葉が熱を帯びる。

ホタルの幼虫が水中で生活するのは２、３年という。来年の夏には、光の帯を描いてうれしそうに乱舞する姿に出合えるかもしれない。

■遠望近信　大野治代さん（７１）大阪府箕面市、元大手前大教授

早月川のすぐ近く、剱岳が正面に見える場所で育ちました。小中高校時代はいつも剱岳の威容を見ながら家に帰りました。特に雪景色は、今も目に焼き付いています。

以前は本当に静かな所でしたね。若いころに帰省した際、北陸自動車道の有磯海サービスエリアができていて、車などの音の大きさにびっくりしたものです。

最近、国道沿いに色彩の強い看板が増え、多かった屋敷林も減っています。素朴で素晴らしい風景を、いつまでも残していってほしいと思います。（旧姓栗三、栗山出身）